

岡山大学 MONTHLY DIGEST

VOL. 50
2020.6

TOPICS

1

国際原子力機関IAEAと協定調印のWeb会議を挙行 最新がん放射線治療法BNCTに関する協定を発展継続



本学は国際原子力機関(IAEA)の原子力科学・応用局と、最新のがん放射線治療法であるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)に関する協定を結びました(6月4日付)。6月18日には両者間でWeb会議を行い、本学の榎野博史学長とIAEAのNajat Mokhtar事務次長(原子力科学・応用局長)が参加してオンライン調印式を実施しました。

調印式で榎野学長は「岡山大学の研究者とIAEAとの協同で、BNCTの技術をさらなる段階へと高めていきたい」とあいさつ。榎野学長とMokhtar事務次長とで互いに協定書に署名しました。本学は名古屋大学やIAEAと連携し、新世代のBNCTの技術開発や教育プログラムの開発に取り組んでおり、今回の協定によってBNCTの技術発展と教育を加速させ、SDGsに貢献することが期待されます。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9471.html

TOPICS

2

地球憲章国際審議会委員の世界の一人に 横井副学長・ユネスコチェアホルダーが選出

公正で平和な、持続可能な21世紀の地球社会を迎えるための倫理的かつ精神的な価値や原則を明らかにした世界的宣言の一つである「地球憲章」が今年で発足20周年を迎えるにあたり、地球憲章国際本部が、本学の横井篤文副学長(特命(海外戦略)担当)・ユネスコチェアホルダーを地球憲章国際審議会委員に選出しました。任期は今年の6月1日から3年間となります。

横井副学長は、長きにわたり持続可能な社会の実現へ向けて、若者(ユース)の観点から国連・国際機関をはじめとする多様なパートナーシップを構築して世界的な展開を進めており、本学においても「SDGs大学経営」の推進や、持続可能な開発のための研究と教育に関するユネスコチェアホルダーとして、ESDとSDGsの統合的な取り組みを通じたさらなる推進を国内外で展開していることなどから、このたび地球憲章国際審議会委員に選出されました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9464.html

Pick up!

矢掛町江良集落「輝け！江良元気会」より、学生の支援のためお米1トンを寄贈いただきました



6月16日、岡山県矢掛町中川地区の江良集落がつくる「輝け！江良元気会」より、新型コロナウイルスの影響により生活が困窮している学生の支援のため、お米1トンを寄贈していただきました。

同地区とは、2012年から本学留学生と田植え体験、地元の祭り、ホームステイなどの交流を続けており、平成30年7月豪雨の際は、学生らがボランティアとして、被害を受けた同地区の復旧支援にあたりました。今回の寄贈は、「輝け！江良元気会」の方からの、今までの交流や支援へのお礼と、生活に困窮した学生を助けたいとの思いにより実現。寄贈式終了後、「輝け！江良元気会」の方々から、会場に集まった本学留学生約130人に対し、小分けにしたお米を配布していただきました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9465.html

TOPICS

3

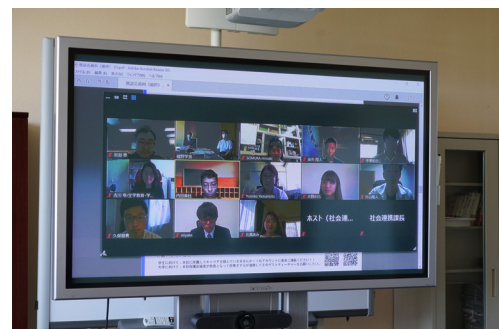
榎野学長らがSDGsアンバサダー学生とオンライン懇談会を開催 今後のSDGsアンバサダーへの支援体制構築に活用

榎野博史学長らは5月29日、新型コロナウイルス禍におけるSDGsアンバサダー学生の活動の現状を把握し、今後の支援体制の構築に活用するため、本学SDGsアンバサダー学生8人と、遠隔会議システムを利用して懇談会を開催しました。

榎野学長はSDGsアンバサダーに期待することや本学のSDGsの取り組みについて紹介し、若手の教員・職員やSDGsアンバサダー学生を構成員とするSDGs未来懇談会（通称：ミライコン）の設置について説明しました。学生は、現在行っている活動や今後計画している活動について紹介し、学内外での連携に向けた支援を必要としているとの意見を述べました。教員からは地域のニーズを汲み取ることや、活動目的に立ち返って考えていくことも必要といったアドバイスがありました。

榎野学長は「若手の教員や職員、皆さんも参加できるミライコンの場で、教職員と学生が一体となったSDGsの推進に向けた議論を進めていってもらいたい。そうした中で課題解決が図られることを期待している」と締め括りました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9439.html

PRESS
RELEASE

1

小惑星「リュウグウ」が大量の有機物からなる可能性を示唆 「はやぶさ2」タッチダウン時に巻き上がった破片の色から推定

岡山大学惑星物質研究所の中村栄三教授らの研究グループPML (The Pheasant Memorial Laboratory) は、小惑星探査機「はやぶさ2」が小惑星「リュウグウ」にタッチダウンした直後に小惑星表面から巻き上がった破片の色（アルベド）が表裏で異なることに着目し、解析を行ったところ、リュウグウが含む有機物は約60%であることを導きました。望遠鏡と探査機による分光観測からは、リュウグウは数%の有機物を含む炭素質コンドライトに似た小惑星だと想定されていましたが、有機物量がこの想定をはるかに超えるという今回の結果は、リュウグウが彗星だったことを示唆します。つまり、彗星だったリュウグウは、太陽近傍を周回する間に氷を失い、有機物の濃縮と岩石の濃集が促進された結果、瓦礫状かつソロバン玉状の構造になったと推定できます。

今回導かれた「三朝モデル」は、「はやぶさ2」が今年11～12月に持ち帰る試料を解析することによって検証が可能です。「はやぶさ2」プロジェクトにおいてJAXA・宇宙科学研究所と連携協定を締結した岡山大学惑星物質研究所は、フェーズ2キュレーション施設として初期総合解析を担当します。従来の想定を超えた発見により、太陽系科学にパラダイムシフトが起きることが期待できます。本研究成果は6月15日、科学誌「Astrobiology」のオンライン版に掲載されました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id732.html

PRESS
RELEASE

2

人工知能を用いた新型コロナ肺炎の 画像診断システムの有用性を検討する研究を開始

大学院医歯薬学総合研究科の河原祥朗教授（実践地域内視鏡学）、株式会社両備システムズの研究グループはカナダのウォータールー大学、DarwinAI社によって開発された人工知能（AI）をプログラム活用し、胸部X線画像から新型コロナ肺炎を検出するシステムを開発しました。この度岡山大学病院倫理委員会の承認を受け、このシステムの有用性を検討する研究を開始します。

新型コロナウイルス感染症を多く経験した医療機関と連携し、新型コロナ肺炎の患者さんの胸部X線写真を集積し、正常な胸部X写真も含めて本システムの診断性能を検証します。

本研究により、同システムによる新型コロナ肺炎の診断における有用性が証明されれば、CT、PCRなどさらなる精査が必要となる的確な患者の拾い上げ、絞り込みに大きく貢献できると考えます。さらに、新型コロナ肺炎は、パンデミックが終息した後は、市中肺炎として季節ごとに蔓延することが予想され、専門病院以外のクリニック、一般病院や、専門医以外の医師でも本疾患に遭遇する機会が増加すると思われます。そのような場面において、専門家以外でも診断のばらつきが減り、正診率が向上することで、患者さんが適切な治療を受けることができると考えられます。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id739.html

